

勤務医に対する手当について一考 ～Part II～

市立三次中央病院 診療部長・外科主任医長 立本 直邦

平成20年4月に広島県医師会勤務医部会の一員とさせていただきます、早丸7年が過ぎ、今回で何と4回目の執筆依頼（＝順番）を受けることになりました。前回2年前の執筆では4回目となる次回は「起承転結」の「結」にふさわしい内容で締めくくらせていただききたいと思います、という一文で終わらせていただきましたが、この調子でいけばまた依頼が回ってきそうですので、今回はスピノフ企画で寄り道をさせていただこうと思います。

勤務医部会は、勤務医の抱える多くの問題点を改善していくことを最大の目的のとして種々の活動を行っています。この勤務医ニュースに日ごろ感じていることを自由に掲載することもその一環としてお許しいただいておりますので、今回は広島県下の施設でもそろそろ実現、広まっていけば、それこそ勤務医部会の存在意義も上がって、勤務医会員からも頼もしい部会と思われるようになるのに、と思うことについて情報提供も交えながら記したいと思います。

2回目の投稿で、「勤務医に対する手当について一考」と題して、山形大学病院で行われている「診療従事特別調整手当」、いわゆる“インセンティブ”の運用について紹介いたしました。その後、東京大学病院、和歌山県立医科大学病院を始め名の通った施設でも少しずつ広まりを見せているようですが、医師個人にインセンティブが支払われている施設は1割に満たないとも言われています。各施設での勤務医の労働環境改善の一番の特効薬は、やはり医師数の増加だと思います。しかし、それがすぐに叶う時代でもありませんし、叶う施設もごく一部に限られています。また数だけの問題でもなく、専門性が高くなればなるほど“できる”医師の十分な確保は容易ではありません。手術・治療が成功した時の達成感が勤務医としてのモチベーションを維持しているのは言うまでもありませんが、それだけで長く維持するのも困難です。開業医も生き残りに厳しい時代と伺いますが、“できる”勤務医を引き留めきれないこともよく経験します。

すでにご周知のように、平成22年、平成24年の診療報酬改訂で手術手技料は大幅にアップしました。本来はアップ分のある程度は医師個人に支払われて当然だと思いますし、明記はしていないものの厚生労働省もその考えを持っていたと思いますが、実際には、病院の収益に回っています。医療補助業務者の配置、高度医療機器の更新・購入などでももちろん還元もされていますが、医師個人に

とってはまったく見合っていないと思います。

インセンティブ制度の費用対効果の懸念や制度導入後の職員間の不満の懸念などからなかなか踏み切れない施設も多いとは思いますが、導入後うまくいかなければ廃止も含めて検討すること、を前提にしておけば済むこと＝納得できることでは、と私はつい軽く考えてしまいます（幸い導入後に廃止した話は聞きません）。

プロ野球界では、ジャイアンツ・ON全盛時代には、年棒交渉の話題が誌上などで賑わったことなどなかったと思います。本業以外での収入が桁外れであったことは容易に想像できますが、好きな野球が思い切りできれば、との土壌があったからとも思います。時代は変わり、三冠王・落合選手の時代になると、本業＝野球での正当な評価（年棒）を獲得するために代理人を立ててまでの“闘争”までもが繰り広げられるようになりました。当初は違和感を覚えた見る側（ファン）も今ではそれをまったく普通のことと思うようになりました。私も若かりし頃は、手術・経験ができるだけ多く積みさえすれば、待遇などは二の次、最低限の生活さえできれば、とあって勤務しておりましたし、多くの優秀な先輩方も宴席で愚痴を漏らされても、表だって待遇改善を求める機運などまずありませんでした。最近では、他院より転勤赴任される先生の中には、前の施設より待遇が下がるのは納得できない旨をしっかりと申し出る先生もいらっしやる時代になりました。かなり遅れてはいますが医療界も落合世代になってきていると実感します。管理職に身を置くものとしては、“できる”勤務医にはそれ相応の待遇提供を行い、できるだけ長く勤務していただきたい、と切に望むばかりです。

インセンティブ制度は、各施設での勤務医の労働環境改善には直結はしないかもしれませんが、しかし、施設側が勤務職員の業務内容、特に過剰な業務量を十分に評価しているという姿勢を見せることはモチベーションの維持に貴重な一役を担うと思います。また、インセンティブ制度は、勤務医師だけでなく、看護職員、コメディカル職員、事務職員など、すべての施設職員に対しても適応されたものが導入されるべきだと思います。運用方法、規模などは施設の諸事情によってさまざま良いので、まずは導入をすることが重要である、と判断される施設が広島県下でもひとつでも多く出現することを願うばかりです。さらにそのために勤務医部会でできる活動があれば会員の皆さまからお知恵を拝借できれば幸いです。